

If you are indecisive and plan to do something about it, you can take immediate comfort in the fact that indecision is not necessarily due to ignorance and slow thinking. (1)On the contrary it is often thinking of so many things and consideration of so many doubts that result in the difficulty to reach and act on a simple decision. The more intelligent you are, the more you may be inclined to consider rapidly many factors before making a decision. If you were feeble-minded, you would have little or no difficulty, for you wouldn't be able to think of a variety of possible consequences. (2)Your difficulty may be that you have acquired the habit of applying to a multitude of little, unimportant things the same serious consideration you might advisedly give to vital matters.

下線部(1)の前には分かりにくい箇所はない。

下線部(1)は内容を無視して構文を捉えようとするのが難しい。

全体は it is ~ that ... の強調構文だが、文脈を考えなければ、it=前出の語 indecision (or 前文の内容 indecision is not necessarily due to ignorance and slow thinking) とも取れる。その場合、that は thinking of so many things and consideration of so many doubts を先行詞とする関係代名詞ということになるが、それでまったく意味が通じない訳ではない。it is often thinking を進行形と取るのは論外である。

「優柔不断とはしばしば、単純な結論に達してその結論に基づいて行動するのを困難にする、非常に多くのことを考え、非常に多くの疑問を考慮することである」(直訳)

なぜ一応の日本語になるかということの理由は、強調構文の that が関係代名詞と似て非なるものだからである。関係代名詞との混同で which や who が使われることはすでに承知のはずである。

It is a nuclear weapon which can destroy a great number of people in an instant. という文の which は、It が前出の語を受けていれば普通の関係代名詞だが、そうでなければ強調構文の that の代りである。

前者の場合には「それは核兵器である」と言っておいてから、その核兵器はどんなものであるかを which 以下で再把握しているのだ。 that 以外の関係詞が疑問詞と同形であることの本質が現れている。

一方、後者の場合には「それは核兵器である」と言っておいてから、それはどんなものであるかを which 以下で再把握しているのだ。

したがって文脈を無視すれば2通りに読める訳である。

今回の下線部は文脈からして強調構文である。それを踏まえて少し意識してみよう。理由は、that result in ~ が一種の無生物主語だからだ。

[下線部(1)までの訳]

もし自分が優柔不断で、それを何とかしようとしているのであれば、優柔不断は必ずしも無知や思考の鈍(のろ)さのせいではないという事実にすぐに慰めを得ることができる。(1)それどころか、単純な結論に達し、その結論に基づいて行動するのが難しくなるのは、往々にして、実に多くのことを考え、実に多くの疑問を考慮するからである。

下線部(2)まで特に難しい点はない。

下線部(2)はで基本的な文構造の理解と動詞の語法の知識が問われている。

the habit of applying の of が同格の of であることは言うまでもない。問題は applying 以下の理解である。

apply には他動詞用法 [apply A (to B)] と自動詞用法 [apply to ~] があるのは基本的な知識。applying to ~ となっているので、一見するとこの applying は自動詞に見える。ところが applying to a multitude of little, unimportant things で apply to ~ の形が出来た後に、the same serious consideration (that) you might advisedly give to vital matters とそのまま名詞が続いている。

ここで apply A to B → apply to B A という発想が浮かぶかどうか。つまり

applying the same serious consideration you might advisedly give to vital matters to a multitude of little, unimportant things が本来の語順ということになるが、to a multitude of little, unimportant things と関係詞節(接触節)つきの the same serious consideration you might advisedly give to vital matters では、元々の語順だと何か座りが悪い。簡単に言えば短前長後の原則に反することになる。

英語は一部の代名詞には格変化があるものの、日本語の助詞に当たるものがないので、語順によって文構造を規定するのが大原則(いわゆる五文型)だが、原則はあくまでも原則に過ぎない。諸々の倒置が生じる所以である。

[下線部(2)までの訳]

聡明であればあるほど、決定を下す前に多くの要素を素早く考慮に入れる傾向がそれだけ強くなるかもしれない。もし頭が弱ければ、(単純な結論に達し、その結論に基づいて行動するのに)ほとんど、あるいはまったく苦勞しないだろう。というのは、起こりうる様々な結果について考えることができないだろうから。(2) 優柔不断で困るのは、たいへん重要な事柄にわざわざ払うかもしれないのと同じ真剣な考慮を、多くの些細な取るに足りない物事にも当てはめる癖が身についていることかもしれない。

※今どき advisedly [発音-zidli] ≒ intentionally を知っている人は例外かもしれない。しかしこの語を省いて訳しても、apply to B A が纏めていれば、減点はわずかなはずである。

In his teens the young man is impatient of what he considers to be the unduly stilted vocabulary and pronunciation of his elders and he likes to show how up to date he is by the use of the latest slang, but as the years go by some of his slang becomes standard usage and in any case he slowly grows less receptive to linguistic novelties, so that by the time he reaches his forties he will probably be lamenting the careless speech of the younger generation, quite unaware that some of the expressions and pronunciations now being used in all seriousness in churches and law-courts were frowned upon by his own parents. In this respect language is a little like fashions in men's dress. The informal clothes of one generation become the everyday wear of the next, and just as young doctors and bank clerks nowadays go about their business in sports jackets, so they allow into their normal vocabulary various expressions which were once confined to slang and familiar conversation.

ポイントは前回と同様であり、下線部の語順は、allow A into B → allow into B A である。

主節の前に so があるときの as は「ように、とおりに」(いわゆる様態の as) だが、この so は日本語に訳す必要はない。また so を取り去ってもこの as の意味は変わらない。

[全訳]

10代のときには、若者は、必要以上に堅苦しいと思う年長者の語彙や発音を我慢できず、最新の俗語を使って自分がいかに時代の先端を行っているかを示したがるが、しかし年月が経つにつれて、彼が使う俗語の中には標準語法になってしまうものもあり、またいずれにしても当人は次第に目新しい言葉に対する受容性を失っていく。その結果、40代になるころには、おそらく若い世代の不注意な言葉づかいを嘆くようになっているが、教会や法廷で大真面目に使われている表現や発音の中には自分の両親が眉をひそめたものもあることにはまったく気づいていない。この点で、言語は男性の服の流行に少し似ている。ある世代の略装は次の世代の普段着になり、そして若い医師や銀行員が今日スポーツ用の上着を着て仕事に取り組んでいるのと同じように、彼らは、かつては俗語や打ち解けた会話に限られていた様々な表現を通常の語彙に取り入れていくのである。

The time of change is upon us. The need for change has taken hold of us. We are changing, we have got to change, and (1) we can no more help it than leaves can help going yellow and coming loose in autumn. — We've got to change. And in our power to change, in our capacity to make new intelligent adaptation to new conditions, in our readiness to admit and fulfill new needs, to give expression to new desires and new feelings, lie our hope and our health.

While men are courageous and willing to change, nothing terribly bad can happen. Change in the whole social system is inevitable not merely because conditions change though partly for that reason — but because people themselves change. We change, you and I. we change and change vitally, as the years go on. New feelings arise in us, old values decline, new values arise. (2) Things we thought we wanted most intensely we realize we don't care about. The things we built our lives on fall into fragments and disappear, and the process is painful. But it is not tragic.

下線部(1)がお馴染みの no more ~ than ... の構文であることを見抜けない人はいないはずだ。we can no more help it = we can no more help changing の意味も、cannot help -ing (=cannot but V = cannot help but V) を知っていれば問題ない。したがって、この下線部和訳はせいぜい標準レベルである。

下線部の下の行 in our power to change ... lie our hope and our health. は(広義の)「場所・方向の副詞句+完全自動詞+主語」であるが、これも lie in ~ (「~に在る」)を知っていれば直ぐにわかる。ただし前置詞が常に in であるとは限らない。

ところが下線部(2)になると、一転、一読して文構造を掴める人がはたしてどれだけいるだろうか。東京大学が英文和訳の問題として、意図的に文法上の破格文を出題していた時代はともかく、英文和訳と和文英訳一本槍(二本槍?)を貫いて孤塁を守っている京都大学の下線部和訳といえども、短文でありながらこれほど構文把握に苦労する英文を出題することはまずないだろう。通常は、文脈を把握する力で難解な構文も読み取れるものだが、今回は文法と構文固有の知識がないと、正確な和訳を書くことは難しい。ただし、例外的に、文脈把握力(国語力)で完璧な訳文を作り上げる人もいるが、あくまでも例外である。

まず原点に戻って SVO ... から押さえていこう。わずか1行のセンテンス内に、明らかに主語の働きをしている we が4つもある。どれが文全体(主節)の主語なのか。この場合、文頭の Things がそれに当たると考える人はいないだろう。

Things we thought つまり「名詞+SV」という形から we thought ... に関係詞節(接触節)の匂いを感じ取るのは比較的容易なはずである。

一方「動詞+SV」という、通常、接続詞 that の省略に当たる形が2箇所ある。

we thought we wanted ... と we realize we don't care ... である。

ただし「名詞+SV」には「O+SV」という目的語を前に出した倒置の場合もある。通常は、この程度の知識でこの短文の構文は掴めるはずだが、今回はそうはいかない。英語の語順に従って前から押さえていこう。

もし Things which we thought we wanted ... となっていれば、つまり関係代名詞の省略がなければ、連鎖関係詞節という大げさな名称で呼ばれる結合のパターンであることはもっと容易に見抜けたはずだ。

(1)That all men are equal is a proposition to which, at ordinary times, no sane human being has ever given his assent. A man who has to undergo a dangerous operation does not act on the assumption that one doctor is just as good as another. Editors do not print every contribution that reaches them. And when they require Civil Servants, even the most democratic governments make a careful selection among their theoretically equal subjects. At ordinary times, then, we are perfectly certain that men are not equal. (2)But when, in a democratic country, we think or act politically we are no less certain that men are equal. Or at any rate — which comes to the same thing in practice — we behave as though we are certain of men's equality. The human mind has an almost infinite capacity for being inconsistent. (Partly adapted.)

最難関大学を目指す人で下線部(1)を日本語に訳せない人はむしろ例外であろう。仮主語を用いて、It is a proposition to which, at ordinary times, no sane human being has ever given his assent that all men are equal. とすると、かなりぎこちない文になる。やはり短いものを先にもってくるという原則は重要なようである。

4行目の contribution という語を見て「貢献」という訳語しか浮かばない人は完全なボキャ貧である。「寄与(貢献)/寄付/寄稿(投稿)」と語呂合わせをすれば簡単に覚えられる。6行目 subject の「臣民/国民」も必要な単語のうち。

一見、下線部(2)前半の構文を掴みにくい人は、その原因がどこにあるのか分かるだろうか。実に単純なことで、we think or act politically と we are no less certain that... の間にカンマがないからである。挿入句を外してすっきりさせ、But when we think or act politically(,) we are no less certain that men are equal. とすれば、分からない人はまずいないだろう。英語の Style Book (文章読本) では、前に置いた副詞節と主節の間にはカンマを打つのが望ましいとされているが、実際にはカンマを打たない人はいくらもいる。逆に挿入句の前後のカンマを省いて、But when in a democratic country we think or act politically, we are no less certain that men are equal. としたほうが分かりやすいかもしれないが、それはまさに筆者の自由である。

we are no less certain that men are equal = we are no less certain that men are equal (than we are ~~certain~~ that men are not equal) = we are as certain that men are equal (as we are ~~certain~~ that men are not equal) であるが、ポイントを3つに分けて見ていこう。

①no+比較級=反意語の同等比較 は基本 or 標準レベル。

no less than 100 dollars = as much as 100 dollars

no less than 100 books = as many as 100 books

②no less certain と等しい表現は、as much certain as であるように思われるかもしれないが、形容詞・副詞の原級に much がつくことはないので、no less certain than = as certain as である。

このことは This house is less large than that. = This house is smaller than that. であるのに対し、This house is no less large than that. では、副詞の no が less にかかって less の程度、つまりその差、はゼロだということを表している (no = by zero degree) ので、

This house is no less large than that. = This house is as large as that. であり、This house is as much large as that. とする必要はないのと同じである。ただしこの説明が解りにくい人は、このことには深入りしないほうがよいだろう。

③than 以下, as 以下の certain の消去。これについては「[英語下線部和訳](#)」の2を参照。

①と②については、「[重要英語文法](#)」の [比較の表現](#) を参照。

下線部(2)第2文の Or at any rate — which comes to the same thing in practice — で非限定用法の関係代名詞 which が受けているのは、we behave as though we are certain of men's equality という後の文(主節)の内容である。which comes to the same thing in practice (as thinking or acting politically with the certainty that men are equal) と補ってみると解りやすい。ただし、この場合、先行詞という言葉は当てはまらない。こうした用例は多くはないが、皆無というわけではない。なお、前文の内容を受ける非限定用法の which がセンテンスを変えて用いられている例は「[英語下線部和訳](#)」の18で取り上げている。

in practice=practically≈almost は言うまでもない。

[全訳]

(1)人間はみな平等であるというのは、普通るときには、正気の人なら誰もけっして同意したことの無い主張[説/命題]である。危険な手術を受けなければならない人は、ある医者も別の医者も腕はまったく同じだという仮定に基づいて行動することはない。編集者は自分のところに届くすべての投稿を記事にするわけではない。また公務員を求める際、きわめて民主的な政府であっても、理論的には平等なはずの国民の中から厳選するのである。そういうわけで、普通るときには、私たちは人間は平等ではないと完全に確信している。(2)しかし、民主的な国において、私たちが政治的に考えたり行動したりするときには、ふだん人間は平等ではないと確信しているのと同じくらいに、人間は平等であると確信している。あるいはとにかく---実際には[ほとんど]同じことになるのだが---あたかも人間は平等であると確信しているかのように振る舞う。人間の心は、矛盾に対してはほとんど無限の能力を持っているのである。

To know how to skip is to know how to read with profit and pleasure, but how you are to learn it I cannot tell you, for it is a trick I have never acquired. I am a bad skipper; I am afraid of missing something that may be of value to me, and so will read pages that only weary me; when once I begin to skip, I cannot stop, and end the book dissatisfied with myself because I am aware I have not done it justice, and then am apt to think that I might as well never have read it at all.

one sentence が5行に及ぶ、一見たいへん息の長い文だが、実際にはセミコロンを多用しているためであり、途中、何カ所かでセンテンスを変えることも可能である。つまり、長いセンテンスに有りがちな難解な文構造ではけっしてない。

下線部の前は, how you are to learn it I cannot tell you ← I cannot tell you how you are to learn it (OSV ← SVO の倒置)と how you are to learn it =how you should learn it を指摘し, trick には「こつ/秘訣/要領」の意味があることを確認するだけで十分だろう。

下線部2行目の will は少々わかりにくいだが、文脈からして、いわゆる「未来」を表しているのではないことは明らか。通常1人称の主語には用いないとされる「習慣, 習性」を表す will と理解するのが自然だが、特に訳語に明示する必要はないだろう。「過去の習慣」を表す would のほうがはるかに一般的なのは、「現在の習慣」は助動詞を用いない現在時制で表せるからだ。I get up at seven except on Sundays.

3行目の end the book dissatisfied with myself の dissatisfied は分詞構文(付帯状況)だが、前に置かれている述語動詞が自動詞であれば補語という解釈も成り立つ。一般論として、意味上の差がなければことさら文型にこだわる必要はない。五文型は英語の文構造(語順)を理解する上でたいへん有効ではあるが、あくまでも便宜的なものである。cf. return home displeased 「不機嫌(な状態)で帰ってくる」

4行目以下は do ~ justice [do justice to ~] と might as well ... (as ~) というお馴染みの慣用表現を正確に理解しているかどうか。
cf. You might as well throw away your money (as lend it to him).

[全訳]

とばし読みのやり方を知っていると、実益と楽しみを兼ねた読み方を知ることになる。しかし、それをどうやって身につけたらいいのか、私は人には教えられない。というのは、とばし読みは自分が身につけたことのないこつだからだ。私はとばし読みが苦手である。自分にとって大切かもしれない箇所を読みそこねるのを恐れ、そのために飽き飽きするだけのページを何ページも読んでしまうのだ。私はいったんとばし読みを始めると、止まらなくなり、その本を正当に扱わなかったことを承知しているから、自分に不満なままその本を読み終えることになる。そうになると、どうせなら全然読まないほうがよかったのだと、ともすれば考えてしまう。

比較的平易な英文を取り上げた理由には、超長文の飛ばし読みを強いる一部の大学に対する批判の意味もある。「ともすれば考えてしまう」はもちろん be apt to think の訳だが、一昔前なら、教師である以上、この程度の訳を示さなければ納得しない生徒が少なからずいたものだ。はたして現在は。